

「狂人のみが真理を口にす  
る」(340)。だがその発作  
は、定義からして常人には  
理解され得ず、信仰共同体  
も、組織防衛のために、開  
示された真実を封印し、「愚  
昧」へ逃避する(拙連載第  
188—9回)。

本書最終章で著者は「愚  
かと云ふ貴い徳」(348)を  
谷崎潤一郎に見出す。その  
『少将滋幹の母』(362)の  
描く「色好み」平中が糞に  
塗れる愚行は、紫式部も源  
氏物語「末摘花」にちゃっ  
かりと援用していた。それを  
敷衍した谷崎作品をベケ  
ット『初恋』と並べて論ず  
る快挙は、いかなる「比較  
文学者」も想定しなかった  
「荒唐無稽」だと著者は北  
叟笑む(369)。

その糞尿譚の「法悦」に、  
評者は「蚤虱 馬の尿 [パ  
リ] する枕もと」を想起し  
た。ニーチェはトリノで、  
虐待される馬を目撃して狂  
気に陥った。だが件の馬は  
人尿に塗れて快楽に浸り、  
芭蕉は奥羽で馬尿を嬉々？  
として浴び、谷崎は糞尿に  
塗れる愉悦へと倒錯した。  
そこには藝術という「純粹  
なる愚」(221)を肯定する  
「高潔なる狂気」(227)が  
顕現する。「歯が二度と痛  
まないように歯を抜き取る」  
愚は『善悪の彼岸』へと  
突き抜ける(223)。ニー  
チェとバルトは芭蕉の俳諧  
の下、老子の「大愚」と踵  
を接する。本書はこの「眩  
暈」の錯綜に踏み込んだ。

『摩滅の賦』(2003)を  
踏まえた著者が、『親鸞へ  
の接近』、『無明 内田吐夢』  
を経て、予告される『零落  
の賦』へと沈淪を遂げるに  
は、本書の聡明なる「愚行」  
を回避することは許されな  
かった。『愚行の賦』は、  
その文業／行における「迷  
陽」(339)の布石となるの  
だろうか。

(了)

連載 214  
愚行の撲滅を目指すことに勝る愚行はない

零落の供笑か供笑の零落か(下)——四方田犬彦著『愚行の賦』(講談社)へのマルジナリア

国際日本文化研究センター研究員・  
総合研究大学院大学教授・  
放送大学客員教授  
稲賀繁美

(承前)『愚行の賦』に  
は、フローベール、ドスト  
エフスキー、ニーチェさら  
にはロラン・バルトといっ  
た文人たちが登場し、末尾  
には谷崎潤一郎の「愚行」  
が俎上にのぼる。「愚」に  
「徳目」を見る著者だが、  
その「見識」は著者や読者  
を「愚行」へと誘うのか、  
そこから解き放つのか。本  
書に浮上しつつある「健全  
さ」を不健全に転倒し、評  
者の「暗愚」を晒したい。

人は時として思い設けぬ  
「愚行」の標的に選ばれる。  
「危険な思想家」と指弾さ  
れた竹山道雄は「一日モ早  
ク死ンデクレ」との暴言あ  
る来信に、新聞随筆欄執筆  
のための絶好のネタを見出  
し、偽名の差出人に謝意を  
表した。この「伶俐さによ  
る報復」(219)もニーチェ  
『この人を見よ』由来の、  
意図的な「愚行」だったの  
だろうか(『竹山道雄と昭  
和の時代』:371)?

「愚行と戯れる」大愚の  
供笑は、愚行からの自由な  
のか? 「往古の世界文学  
全集」遍歴の末、この問い  
に直面した著者は「問題の  
巨大さに眩暈」(315—9)  
を催す。だが「眩暈」*étourdi*  
(300)こそ、芭蕉の「稻  
妻に悟らぬ人の尊さよ」に  
感銘したRoland Barthesが  
「法」の「縦び目」に見た  
愉悦だったはず(314)。  
驚愕*stupéfaction*とは、予  
期せぬ突発事態に「魂消」て、  
「愚鈍」*stupide*な状態に陥  
ることの謂(355)。それは  
神仏の到来に不意に襲われ  
る*epilepsia*「神聖なる病」  
*morbussacer*(181)。だが、  
「愚人」は「稻妻」にも「悟  
らない。

そして著者は、既に先行  
する著作『親鸞への接近』  
で「愚禿」(320)の「愚人  
の心」に触れていた。——  
「悟り」は他力により不意  
に到来し、光明に囚われた